第一次松方内閣の崩壊（その5・完）

佐々木　隆

A Study on the Collapse of the First Matsukata Cabinet (Part 5, The final)

The dismissal of Vice Minister for Home Affairs Shirane gave a big shock to the political circle. His replacement, Vice Minister Kitagaki, resigned to protest such an action, and other cabinet members coming from Satsuma, namely, Minister of War Takashima, and Minister of the Navy Kabayama also made gestures of resignation. The resignations of these two cabinet officials were temporarily averted due to the intervention of the elder statesman Kuroda but the political circle was again thrust into confusion because the Minister for Home Affairs Kohno fired the prefectural governors who were involved in interfering with the general election. Senior governers came to Tokyo to protest such a high handed action and both Takashima and Kabayama finally expressed their intentions to resign.

Prime Minister Matsukata, who had lost confidence in the management of political affairs, expressed an intention to resign but retracted later after receiving Emperor Meiji's words of encouragement. Matsukata tried to purge cabinet officials from Satsuma and to tide over the crisis with the support of Non-Kagoshima-born statesmen but such a maneuver was interpreted as a betrayal by elder statesmen coming from Satsuma and Chōshū. Accordingly, those elders led by count Akiyoshi Yamada advised Matsukata to resign, and the prime Minister accepted.

As a result, the Second Itoh Cabinet was formed and the *han* clique government was now fully prepared to face the fourth session of the Imperial Diet.

六　松方政権の崩壊

1

白根次官罷免は政界に強烈な衝撃波をもたらし、政局は一挙に流動化した。それは黒田らも指摘するようにある程度予期されたことではあったが、その衝撃力は予想を遙かに上回るものがあった。

まず、白根の後任の内務次官に任ぜられた北垣国道京都府知事は、次官就任を拒否して白根解任に抗議した。政府は七月十四日午後八時、北垣に電報を発して上京を命じた。[1] 先にも触れたように、白根と親しい古参地方官の雄・北垣を後任に定めたのは白根解任の衝撃波を緩和する、白根支持勢力への配慮だったと信ぜられる。北垣は十六日午後六時、東京に到着した。[2] しかし、北垣は次官就任を峻拒し、松方の説得にも応じなかった。[3] 松方は榎本外相に北垣説得を依頼し、榎本は「拝復。貴翰拝読。只今より直に北垣之旅宿を訪ひ説得を試み可申」[4] と活動を開始した。だが、北垣はこれに対して忽然とその姿を晦まし、行動によって白根解任への抗議と次官就任拒絶の挙に出た。七月十七日付松方宛榎本書翰第二信[5]に曰く、

過刻拝復後（午前七時）直に馬使を対山館（北垣氏旅宿）に馳せ、暫く小官の訪問を待居呉候様申入候処、北垣氏自ら来訪可致と馬使之報知により九時迄待てとも来らず。依て再たび馬使を対山館に派し尋候処、該館の下女外務と

内務と間違たるを以て北垣氏は内務大臣方に赴きたりとの事に付、直に電話を以て河野氏官邸え北垣氏之来否を問合候処、今朝来未た来らずと答有之、於是三たび馬使を対山館に馳せ京都厩官に問合たるに、北垣氏は何処に出行きしや更に存ぜずと。故に北垣の行衛于今相知れ不申候。

この事件は単なる行き違いや旅館の奉公人の錯誤などではなく、北垣が松方・榎本らとのコミュニケーションそのものを拒んだと見るのが妥当であろう。北垣は十七日中に、早くも辞表を提出した。『国会』七月十九日号の雑報「新内務次官辞表を提出す」には左の如く見える。

北垣新内務次官には一は以て其位置の永続せざるやを予想し、一は以て河野大臣の下に在るを欲せざるにや、心臓病にて劇職に堪へずと称し、一昨十七日即ち栄転の翌日而かも日曜日にも拘らず辞表を某大臣の手許まで呈出したりとのことなるが〔以下略〕

某大臣とは或は高島・樺山あたりを指すのであろうか。伊東は当時の模様を伊藤に対し十八日、次の様に冷やかに書き送っている。(6)

北垣は厭まて就任を拒み、政府も昨日来持て余し居候様子に而、総理よりは内々小生へも相談を被試、程克相断置申候。今更京都へ復任せしむる訳にも難参、内閣之軽躁も言語に絶へ申候。

中村元雄群馬県知事（日田＝松方派）の起用も検討されたが、松方は結局、渡辺千秋北海道長官（高島＝松方派。渡辺国武の兄）を次官にあてた。他の古参地方官に要請しても北垣の轍をふむ虞れがあるため、気心の知れた直系幕僚の中から選んだのであろう。北垣が固辞を貫いたことによって、白根グループを介して比較的良好な関係にあった松方と古参地方官との関係は実際上断絶した。北垣は渡辺の後任の北海道長官に転じたが、こうした松方・内務省周辺の動揺を、親伊藤の異色の古参地方官内海忠勝（長州。神奈川県知事）は、「実に廟議之変る事猫之眼よりも早し」(7)と揶揄

している。

七月十九日、渡辺千秋が新内務次官に任ぜられ、次官後任問題はそれ自体としては漸く落着した。

2

河野内相の就任と白根次官の罷免は、内務省の後援に大きな期待を抱いていた国民協会に深刻な打撃を与えた。協会では「河野氏は元来民党臭味ある人なり。無条件にて内務大臣となるも感情に於て面白から」[8]ずとして「河野氏が内務大臣たる事を沮まんとするの運動」を行なっていただけに、その衝撃は甚大であった。国民協会有力者の曾禰荒助（山口四区）は七月十五日夜、高島陸相に宛てて次の様な書翰[9]を送っている。

御夜中に付、呈墨札左に奉伺候。

一、今日に至りては如何なる弥縫策に御方針を向はせらるゝ哉。

一、黒幕へ御明渡し御準備にて今日之御決定に出させられたる哉。

一、若し前項に非されは乗取主義者に御明渡之御覚悟に候哉。

右之外奉伺度義沢山有之候得共、余は拝眉之上可申上奉存候。御病中不顧失敬右伺申上候。

「黒幕」云々は伊藤への政権譲渡の動き、「乗取主義者」云々は松方の非薩長閣僚への傾斜を指すものと思われる。曾禰が河野内相就任、白根次官罷免を上述のいづれかを意味するものと位置づけ、協会にとって極めて不本意な事態と捉えていたことが判る。文章が全体的に皮肉の色調を帯びているのは、高島が事態の進行を喰い止められなかったことに、曾禰が憤懣を抱いているからであろう。

事態の急転に伴い、国民協会の前途への不安と危惧は協会首脳の間に拡がっており、中には早くも協会解散論さえ現れるほどであった。七月二十日付伊藤博文宛内海忠勝書翰第一信[10]に曰く、

一、西郷・品川の両人国民協会之重立もの八名を呼ひ左の二ヶ条を謀りたる由。

西郷曰く、諸君政海の現状は承知の通り慨嘆する事のみ、依て拙者は断然云ふ、今日の政府に信を置かす、故に諸君を招き左の二ヶ条を決したし〔略〕。

一、国民協会は政府信否に拘らす独立の運動を為すや否。

一、政府之信否に依り運動するとなれは此際断然解散するや否。

政府の後援が協会存立の大きな拠り所となっており、それが失われた今、協会の存続の是非そのものを問い直す考えがあったことが窺われる。西郷のこうした問題提起に対しては、前議員で「国民協会の錚々たる」メンバーの増田繁幸が「今の政府に信を置かすとの言は甚協会の弱点を示すものなり、吾々は信を置かさるは勿論、今日より正反対に立つと言さるかと難評」を入れ、結局は「右は独立の運動を執り解散せさること」に決している。政府の後援を見込んで成立した協会の弱点をここでも改めて確認することが出来よう。

さて、上述の西郷の問題提起について品川は「西郷の言としては十余年聞かさる憤発にて少し言過きたり」と評しており、会員の奮起を促すためのものと捉えているが、実態は必ずしもそうではなかったらしい。即ち、侍従長徳大寺実則の日記[11]の七月二十日条には「西郷伯洋行或シベリヤ地方、満州地方漫遊ノ事」と見え、このころ天皇の周辺に西郷が外国行きを考えているとの情報が達していたことが窺われる。果して然りとすれば、この時期の外国行きは実際上国民協会を放棄することを意味するから、西郷は早くも協会からの退却を考慮していたことになる。事実、西郷は翌年三月、第二次伊藤内閣に海相として入閣し協会を捨てているが、これらを総合的に考察すると（「その3」をも

参照）、政府の協会への後援に期待をかけていた西郷は、現実の展開を前に協会の前途に自信と見通しとを失い、政治生命の温存を考え始めていたとも考えられる。協会領袖への問題提起は、多分に西郷自身の内面の動揺を反映していたのではあるまいか。

3

河野内相就任・白根次官罷免はかねてからこれに異を唱えていた薩摩出身閣僚即ち高島陸相と樺山海相を強く刺戟した。二人は病気を理由に閣議出席を拒み、政局は俄かに政変含みとなって来た。七月十八日付伊藤宛伊東書翰[12]には左の如く見える。

河野氏内務之椅子を占めたる以来、高島・樺山之両氏今以不平を鳴らし、病気と称して内閣へも出頭不被致、一昨夜久振高島子を訪問種々拝語の内、同子の考に而は最早現内閣維持之目的無之抔申唱られ、松方伯は高島・樺山二子退引被致候様に而は自分も郷ち候より外致方無之とて、一昨夜小生引取候後松方伯、高島子を被訪種々慰謝を被加候末、兎も角再考すへしとの事に而其夜は分袂被致候由、其後之模様は承知不仕候。実は一昨日三田へ参り候処、内閣之困難に付色々物語られ、高島子も相談を試度と存居候へとも所在不相分、小生とは近辺にも有之所在相尋是非至急面晤を得度旨申通し呉との事に有之、其後高島子は紀尾井町之別宅へ被引籠候こと相分り候に付、直と総理へ為致置候次第に而、近頃殊に内務大臣更任以来総理と両子との間は絶て往復もなく至て冷淡之有様に有之候。今度高島子之返答次第に而は破裂に可致も難到と存居候。

高島・樺山の自宅籠居が進退問題に発展する公算が大きく、その場合内閣そのものが危機に陥ると考えられていたこ

とが判る。一方、同じ十八日、伊東が井上馨に送った書状[13]には次の様に見えている。

別冊浄写出来且諸所不穏之文字は改竄を加へ候に付、早速御内諭之通り可取計と存候処、刻下之形勢は河野氏内務に入り候事に付高嶋等は喜はさるのみならす多少黒幕之後援も有之哉に邪推致居、頻りに紛議有之、高嶋等も次第に依りては掛冠致候抔申居候場合に付、縦令伊藤伯を経候ても当分之処御差出し不相成方可然と存候〔以下略〕

高島陸相に辞任の動きが見られることとともに、高島が河野の内相就任の背後に伊藤・井上らの存在を疑っていたことが窺われる。この問題に関して伊藤は「河野を内務に被任たるは伊藤か密奏に出てたり抔と伝るものある由、或は高島頻りに此説を主唱すると云ものあり。何か御聞及之事有之候哉。小生は黒幕破談以来人選等之事勿論関係無之、一時の責遁れに濡衣を他人に為着には無之歟」[14]と内相人事への関与を否定している。また、この書翰では井上が伊東の協力を得て、先の十五ヶ条の政策大綱に続く再度の意見書を準備していたことが判る。この意見書は高島進退問題への悪影響を恐れる伊東の進言もあって未発に終った模様であるが、この時期井上が松方政権に対し攻勢に出ていたことが窺われる。

こうして、高島・樺山の自宅籠居により政局が緊迫化する中、事態の打開に向けて動き始めたのが黒田であった。松方の軍師・後見人を以て任ずる黒田は前年秋の政界復帰以来、松方に様々な協力・助言を行なっていたが、十七日西郷の訪問を受けたのを契機に収拾に乗り出した。七月十九日付松方宛黒田書翰[15]に曰く、

去る十七日西郷伯拙宅へ御入来、例之通不在之旨を以て断上候に付、早速同伯御邸を訪問、必す要用有之と認め云々を以て質問候処、他に無之、高嶋子何にか不平不満足とて出閣なくいつれも面会謝絶いたされ候と聞及び、此之際不容易出来事不能措、乍然同伯今日之身分にて首相初め必す遠慮せざるべし、去とて無視難黙止不得止事、同子え参り篤と事情を承知之末同伯之御忠告被致云々此之上は生へ依頼せざるへからす、併し黒幕連万事万端既に御関係

を謝絶云々の由なれとも致方なく、生へ是非尽力之労を取りくれと頻に懇談有之、生は最早去る十日首相と堅く結約之事故御気之毒ながら御断申上と。同伯押返し御依頼、猶又退て千思万慮するに何分にも目下此上なき難題之御困却之勢世情況に通及するは鏡を掛が如し、前後を不顧用捨なく今日推参する場合と生が赤心吐露反覆利害得失従て安危之分る、所也と十分忠告諫言仕候末、遂に御承諾相成り、依て西郷伯余程心配に付、生より形行申置くれとの事にて帰途同伯邸へ立寄り申候処、生憎不在、大略一封残し置、又同子には是れより樺山子へ云々通牒するよし承候。〔略〕先つ国家之為め御同慶之至に御座候。

例により黒田特有の晦渋な文章であるが、大意は左の通りと見て大過あるまい。即ち七月十七日黒田は事態を憂慮した西郷の訪問を受けて答訪した処、高島に自宅籠居を解くよう説得することを求められたが一旦は断った。しかし黒田はその後再考して高島を訪ね諫言した結果、高島もこれを受け入れた。高島はこのことを樺山に連絡した。これにより黒田は、事態は落着したと判断したようである。

この後、松方の周辺では高島陸相と後藤逓相・河野内相を会合させ、薩摩出身閣僚と非薩長閣僚の関係を調整しようという動きが見られた。七月二十日付松方宛黒田書翰[16]には「乍末行余計之助言誠に多罪に候得共、今夕後藤伯・河野殿・高嶋子御会合は尤も万事万端後藤伯・河野殿御注意必要と愚考罷在、取敢す一片之衷情吐露仕置候也」と見えている。

この時期、薩摩出身閣僚即ち高島・樺山は白根グループや国民協会と提携することにより松方政権の主体性を維持し、それによって子爵級実力者としての活躍の場を確保しようとしていた。松方政権下の「力の真空」は彼らにとって元勲級指導者への道を拓く絶好の機会であり、それ故彼らは「黒幕」の干渉を嫌ったのである。これに対し非薩長閣僚特に河野・後藤は選挙干渉責任問題で主導権を握ることによって（従って白根グループや国民協会を排除することで）

閣内で優越権を確立し、松方政権下の「力の真空」を非薩長実力者の天地たらしめんとしていた。当時、松方政権は「薩土肥内閣」[17]の体裁を呈していたが、薩摩出身閣僚と非薩長閣僚とでは松方内閣の存続を願う点は共通していても、その方法と究極の目標は大きく異なっていたのである。それは河野内相就任・白根次官罷免によって一挙に火を噴き、一旦は鎮火したもののその根本は未解決のため本格的な調整が必要とされたのであった。

二十日夕方の三者会談は順調裡に終ったらしく、七月二十一日付松方宛黒田書翰には「昨夜尊書被下、三大臣御集合之形行御内示誠に好結果に罷成、御互に邦家之為め御同慶申上候」[18]と見えている。混乱は漸く収拾に向かい「表面上は融解致候哉の場合に至」ったようにも見えた。しかし、伊東巳代治が指摘するように、「若し此先き松方が河野に合し候は、、茲に於て一方は松・後・河、一方は高・樺等との間に一大衝突を来すへく、縦し松方は中立の地位を取り候とも高島等に附かさる以上は、矢張後藤・河野…対…高島・樺山之衝突は不相免候次第に候」と、対立の図式はやはり温存されたのであった。伊東は対立再燃の時期を「内閣は又々十一月を待たすして一悶着引起し可申乎」と予測しているが[19]、実際松方内閣はこの十日余り後に倒れるのである。

4

さて、七月十四日の河野の内相就任後も内務省内部と周辺では混乱と動揺が続いていた。内海忠勝は七月二十日付伊藤宛書翰第一信[20]の中で、そうした事情を左の如く報じている。

一、内相は拝命するや大森局長〔鍾一。県治局長〕を呼ひ何時に出省する故宜しく頼むと告けたる由（大森の外局長中一人の知人なき為めなり）。而して内務に出て不肖行政の経験に乏き身を以て暫く此大任を汚す、宜く承知

あれと言捨て直に去り、今日まで一般の局長へは一言せさる由。又局長等も免官すれは格別、自から辞表は出さぬと意を決し居れり。是は内相の意表に出、困却し居ると聞ゆるなり。

一、内相の処置振に依り局長、知事、警部長之内にて二十人余りは直に辞表を出すへし。生等も其勘考中の一人なり。

河野内相と内務官僚・地方官の間の溝渠の大きさを窺うことが出来よう。このころ、内海自身も検討しているように、地方官の間には連帯行動によって中央に政治的圧力を加えようとする動きがあり、新内務次官渡辺千秋は七月十六日付松方宛書翰[21]の中で次の様に述べている。

内治経綸之儀は夫々御計画被為在候儀と奉拝察候得共、地方官之内朋党相結ひ猥に閣臣を動かし大政に容喙せんと謀候もの、如きは是非御陶汰被為在候は而は意外之妨害可相成と想像仕候間、時機速に御決行被為在候儀必要と奉存候。

こうした中、河野内相は七月二十日付で六府県において地方長官の交代を実施した。この中には選挙干渉が最も甚しかった高知県の調所広丈知事（薩摩）、古参地方官の代表格の安場保和福岡県知事（熊本）が含まれていた。[22]

選挙干渉地方官の異動は予想されたこととは言え、改めて関係者に大きな衝撃を与えた。しかもこのころ、内務省周辺では国民協会の結成に際し、白根次官が発したとされる協会への助力を指示した内訓の処理を廻って紛糾が生じていた。七月二十三日付井上馨宛伊東書翰[23]に曰く、

聞く所に依れは国民協会の為に十分世話致し会員入会之儀も精々勧誘致候様との内訓を白根在職之比或る県の警部長へ下したりと歟下さずと歟の議論有之候処、結局何も下さずとの方に極り居候処、昨今に至り其写を発見し愈々下訓の事明白に相成候より俄に其取消を発し相当の混雑有之候由。仍て又高島等は内務大臣之処置を面白からす思

ひ候より松方との衝突を来し候哉とも被察候。

一方、問題の高島は黒田の説得の後も「今猶ほ出閣せさること、云ひ何となく妙に白けて相見へ候事に御坐候」と、依然不穏な動きを見せていた（詳細は後述）。

斯かる中、七月二十四、五日ころになると、古参地方官が任地を離れて上京し、内閣・内務省の措置に抗議する動きが見え始めた。『東京日日新聞』七月二十八日号の雑報「松平知事の運動」に曰く、

躍起連の一人として知られたる松平熊本県知事〔正直。福井〕は一昨々日着京の間もなく安場知事を旅寓に訪ひ、内閣の方針如何によりては我等も決心する処あれは貴公一人先に辞職する抔の事は成らぬといひ、安場愛知も何うやら同意せられたる様子、引続いて松平熊本は昨朝七時頃松方首相を三田の私邸に訪ひ、台閣の針路につき密議に時を移されたりとは東通子の所報なるか、此後の運動は那辺に出づるか知らず。

また、同じ七月二十八日の『国会』の雑報「安場知事辞表を表す」は次の様に伝えている。

安場愛知県知事には其任命の当時業既に辞職せんと決心せしも、一には河野内務大臣が専任司法大臣となるてふ廟議あると、又一には去る十八日の朝其親友たる松平熊本県知事が突如安場氏を福岡市なる那珂河畔の自邸に訪ひたる際、密談数刻共に午餐を喫し遂に別に臨みて進退去就を共にすべしと誓ひしが、後一時は松平知事にも安場氏に辞職を思ひ止まるべしと勧告したりければ、安場氏は此の勧告に従ひしに、一昨日午後松平知事にも大に時事に感じ我も亦断然辞職せんと決心したる旨を芝浜海水浴に在る安場氏の許に報じ越したれば、同日安場氏は其児分とも云ふべき月形潔氏外一名と酒杯の間に密談数刻の上辞職を決定し、昨日愈々松方総理大臣の手許まで辞表を呈出したりと。

当時安場は無断上京中であった。東京ではこのころ「地方長官続々辞職せんとす」との噂が流れており、「安場愛知、

松平熊本、調所鳥取県知事始め地方長官の辞職せんとする者今日の処にては七名ありとぞ」と取沙汰されていた（『国会』七月二十八日号）。結局、松平は辞職しなかったが、安場は辞職を決行し八月二日付で辞表が受理されている。この後、安場は貴族院議員に勅選され、さらに国民協会に入会して幹事長に就任することになる。

5

さて、高島は黒田の説得を受けた後も閣議に出席せず、二十五日ころになると情況は再び深刻化して来た。地方長官人事の敢行が高島らを大いに刺戟したことも十分に考えられる。七月二十五日付伊藤宛伊東書翰[24]はこのころの高島の様子を次の様に伝えている。

高島は頻に松方之優柔竟に先日の黒幕会議を呼起候為今日之事情に立到りたりとの不平を鳴し居候事は有之候由に候へとも、閣下之密奏云々と申事は無之由、又松方之所為に付ては余程憤懣致居候ものと相見へ今以て閣議にも列せすして紀尾井町へ引籠居、昨日訪問暫時閑話を得候節も到底見込無之、松方より頻に内閣へ出頭を勧来候に付明日よりは必す出席可致なれとも、此儘にては全敗之外無之と申語られ候。要するに松方伯か百難を排除して猛進するの決心あらは黒幕会議抔開くに不及、漫りに他人之意見を聞きて心を動かし候より今日の如き内閣の不折合を来すとの不平に有之候。孰れ早晩大破裂を可見と存候。

情況はその後も悪化の一途を辿り、二十七日になると事態は政変の様相を呈して来た。この日の午後、伊東が伊藤・井上宛に送った書翰[25]には次の様に見える。

扨河野氏を内務に被任たる一事に付ては高島・樺山之両子大不平に而、過日来屢々松方より勧誘したるにも拘らす

深く門を鎖して一度も参閣せられす、新聞紙上にも追々漏洩して最早隠蔽すへからさる事実と相成、河野氏も閣僚中に自分之位地に付不平を抱くものあるを聞くに於て其儘打過候訳にも参らさるより、昨朝松方を訪ひ事実推問尚内閣之決心如何に依りては自分一身之栄辱は顧に暇あらす快く引退すへしとまて申迫られ候為、松方も竟に過日来高島子等之挙動に付逐一事実を説明するに立到、本日に及んて忽ち政海に疾風雨を来し内閣破裂之徴候を顕し危機一発容易ならさる形勢に有之候。

また、松方の幕僚九鬼は同じ二十七日、伊藤に対し次の様に報じている。[26]

高・樺両人が過激なる挙動を執り候より其間紛骨砕心渇力仕居候はゝ大概平和に帰しかゝり居候も又々再発、今日は殆んど焦点に達し只今松伯より前文両人へ手詰め之談判有之、右一談而全く和破の界相分れ申候。

高島と河野の対立、即ち薩摩出身閣僚と非薩長閣僚の対立が極めて深刻な段階を迎えていたことが判る。因みに高島は二十五日に山県と会った際、河野について「是非更迭を論し置候」[27]と強硬な態度を持していた。

二十七日の松方の高島・樺山への説得は結局、不調に終った。この結果、松方は政権維持の自信を失い、この日の夕方ついに辞任の意向を奏上した。岩倉具定侍従職幹事（公家）は二十八日、この間の事情を左の如く伊藤に報じている。[28]

昨廿七日午後六時比松方総理拝謁の上、総理兼官ともに辞職の義御直に上奏したり。後又（七時比と云）後藤・河野・榎本・佐野の四大臣拝謁したり。

松方の辞職は表面の理由判然せす。高島・樺山の辞職により自分にも辞職するとの事なる由也。

四大臣の拝謁したるは松方辞職の理由に付如何言上したるや相伺度趣を以御前に相伺ひたるやに伝承す。

松方は四大臣に辞職の理由は云わす、出しぬけに陛下に奏上したるに由る事と承候。〔略〕

俄然辞職の事に至りたるは過日来高島出勤せさるにより早く去就を定め断然男らしくすべしと厳重に総理より高島へ申入れたるより起りたるやに承候。高島よりも余程激論したるやに伝聞候。

高島の論は河野を司法専任に、大木を内務にすべしとの主意なる由に伝聞す。

この書翰では松方の天皇への奏上の内容がよく判らないが、「佐佐木高行日記」九月二十九日条[29]に見える天皇の回顧談に拠れば、

其後高島と樺山とが辞する事となり、松方いよ〳〵困窮したるやうなれば、高島が辞するならば速に解任したらば如何と申聞けたるに、松方は陸海軍大臣の銓衡は私にては出来兼ぬると申すゆえ〔以下略〕

と見え、陸海相の後任を得る見通しが無いことが辞意の原因だったことが判る。また、岩倉書翰には非薩長四閣僚が拝謁したことが見えているが、「徳大寺実則日記」七月二十七日条には「榎本・後藤・河野・佐野四大臣拝謁。依召参朝」[30]とあり、四大臣参朝が天皇の意思によるものだったことが読み取れる。天皇は「陸海軍大臣が辞すれば総理大臣も辞すとは以ての外の事なり」[31]という意向であり、松方にこのことを告げた他、四大臣にも依頼して松方を慰留しようとしていたのである。前引岩倉書翰は「四大臣等より是非留任の事説諭する事に相成り居候由也」と伝えている。天皇は宮相段階で松方の辞表を握り潰しており、この間に善後策を講ずる肚であった。

翌二十八日朝、徳大寺侍従長は勅命により松方を訪ねて強く翻意を促した。「徳大寺日記」[32]同日条に曰く、

依御用総理大臣邸行向。陸海両大臣辞表ヲ奉ルニ付、総理大臣モ職ヲ辞スルハ理由判明セス。且河野ヲ内務大臣ニ任スル節同人方針ヲ尋ネ奏上ノ後被任、現今地方官任命等運ヒ中半途ニシテ職ヲ辞スルハ解セサル事ナリ。総理辞表ハ宮内大臣手許ニ預リ未上奏也。高島・樺山辞表差出サハ後任者陸桂中将、海井上少将良馨可然歟。猶篤勘考スヘシ。

天皇が陸海相辞任が倒閣をもたらすことを嫌ったこと、内務行政の連続性を求めたことが判る。天皇は陸海相後任についても言及しているが、「佐佐木日記」九月二十九日条は陸相人事について天皇が主導権を執った様子を天皇自身の言葉として次の様に伝えている。[33]

有栖川宮へ申談して適任者を定めよと申聞け、朕よりも有栖川宮へ申談じたるに、宮は大山、桂、川上等を推挙せり。大山が然るべきも承知すまじ、桂が適任者ならんと申聞けたるも松方は決断出来ず、高島・樺山が辞すれは自分も辞したしと申出づるので、夫れは一体相判らぬ事なり、陸海軍大臣が辞すれば総理大臣も辞すとは以ての外の事なりと申聞け、後藤、榎本、河野、佐野等よりも説き、徳大寺を遣はして申聞けたれば、踏み止まりて尽力する旨を答へたるが〔以下略〕

天皇が参謀総長で陸軍長老の有栖川宮熾仁親王に陸相後任候補の推挙を求め、大山巌前陸相・川上操六参謀次長（薩摩）・桂太郎第三師団長（長州）の三人の中から桂に絞ったことが窺われる。天皇はこの他にも松方慰留工作を精力的に展開し、先述の徳大寺差遣、そして非薩長四閣僚を介しての説諭がこの日に行なわれた。七月二十八日付黒田宛榎本書翰[34]に拠れば、

今朝辞邸後後藤、河野、佐野等諸氏小子官邸え寄合協議之末、午後一時半頃首相邸え罷越、勅命並に一同之勧告を面陳いたし候末首相には叡慮之渥きに感泣し遂に辞表思ひ止り、明日より是迄之通出勤致候事に相成、閣僚一同も一層協心戮力して首相を助け候事と和談相整候間、御降念被下度不取敢此段得貴意候也。

と見えている。

こうして、松方は天皇の強い意向を体して辞表を撤回し、事態は一旦は「今日之形勢にては他日は兎も角先つ一段落を告け候事、偏に聖慮之致す所とは乍申御先見今更に敬服仕候」（七月二十八日付伊藤宛伊東書翰）という方向に傾き

かけた。松方は薩摩出身閣僚を切り捨て、非薩長閣僚を基礎として政権を維持するかに見えた。

6

しかし、こうした事態の一応の沈静化の裏で、長州閥の元勲級指導者山田顕義の周辺では秘かに松方退陣工作が動き始めていた。七月二十七日付山田宛井上馨書翰[35]に曰く、

過日は態々御来訪被成下、憚他客集合候而子細に事情を尽し候事不能残懐至極に奉存候。〔略〕陳は古沢・斎藤〔修一郎。福井＝井上の幕僚〕等拝謁候而方今内幕事情内陳申上候次第逐一古沢より報道仕候。就而は山県伯幷老台之御思意に於ても黒田・西郷両伯と御面語松方辞職勧告云々之義有之候間、随分流言百出之世態且若し彼是猜疑心を以両伯引受候は、却而長薩離間之親睦破裂に至り可申候間、深く御注意肝要に御坐候。両伯え御面会之御決意に候は、其前一応御面会仕候而表裏面之事情幷に生が心事且将来之眼目とする点にも申上候而其後に御面会被成下候は、好都合と奉存候。当節は尤小事に戒談不仕候而不思之反動力を起し申候。御都合次第一両日御在之為に候は、帰京之上御面語候而も不苦候間、至急御答被下候様奉願候。

山田が山県と協議の上、黒田・西郷を介して松方に退陣を勧告する方向で動き始めていたこと、井上が薩長衝突への危惧からこの動きに対して極めて慎重で山田に事前の意思調整を求めていたことが読み取れる。因みに山田は第一議会末期の感冒と過労、それに人力車事故の後遺症のため静養していたが、漸く病癒えて二十五年三月、政界の第一線に復帰していた。[36]

さて、こうした山田の積極姿勢の背後には、実は長州閥系第二世代官僚・長州閥系幕僚の働きかけが潜んでいた。

長州閥第二世代の有力者江木千之はその回顧録の中で当時の活動ぶりを次の様に伝えている。(37)

其後松方内閣は、閣内の不折合も一の理由となつて、遂に瓦解したが、薩長の元老等は多くは帝都を去つて次の内閣を組織することを企てる人が無い有様であつた。〔略〕自分共は後輩であるけれども、実に其当時の実況を見兼ねたのである、そこで奮然起つて元老を勧説することを同志と申合せた。其同志は古沢滋、松平正直、都筑馨六〔西条＝井上の幕僚・女婿〕等と云ふ連中十数名であつたのである。元老中では山田伯（顕義）が我々に同意を表されて居つた位である。

山田が元勲級指導者としては、早い段階から若手の動きに同調していたことが判る。江木は藩閥有力者への働きかけを左の如く描写しているが、これを見ても山田の積極姿勢が一際目につく。曰く、

そこで自分は同志の申合せに依り、函根宮の下に静養中の井上伯（馨、後の侯爵）を訪ねて、伯等が奮つて内閣を組織されることの必要なるを勧説した。伯は其の主義には賛成であつたが、併しながら自ら奮つて東京へ帰つて、奔走せらるゝまでには至らなかつた。それから小田原に引返し滄浪閣に伊藤伯（博文、後の公爵）を訪ねて同様に勧説したのであるが、是亦自分共の主義には同意を表せられた。それから熱海に静養して居る鳥尾子爵（小弥太）を訪ねて、自分の意見を述べた所が、至極同意であつたが、併し自分と共に帰京して、元老をして内閣を組織せしむるやうに奔走するといふまでに、奮発せしむることは出来なかつたのである。それから大磯の別荘に山県伯（有朋、後の公爵）を訪ねて説いた所が、是亦至極同意を表せられたと云ふやうなことであつて、東京では黒田伯（清隆）が、門には「旅行中」といふ貼出しをして居られたが、其実在邸であつたのである。是は山田伯（顕義）と共に訪ねて意見を述べた所が同伯も全く同意せられたのである。斯様な次第で、其後は山田伯も余程奔走し、他の同志も奔走して、遂に二十五年の八月に伊藤内閣の成立を見るに至つたのである。

伊藤・井上・山県・黒田・鳥尾の対応と比べて山田が事態打開に積極的であったことが判る。山田は次に掲げる書翰に見る様に、松方が支持基盤を非薩長閣僚に移して薩長体制から逸脱することに極めて批判的であった。また、若手と相呼応して行動することは、商法延期問題以来の政治的後退と健康問題による政治的空白に苦しむ山田にとって、失地回復の好機でもあったと考えられる。

山田は七月二十九日、前引の井上書翰に返書を出したが、この書状には松方政権の非薩長化への巻返し策が左の如く述べられている。[38]

陰晴無常之為躰絶言語申候。着々彼之術中に陥候段如何とも遺憾に存、不顧病軀日夜奔走罷在申候。最早辞表取下候上は陸海両大臣撰定に向て一手段相運候より外無之に付、山県・西郷申合方策最中に御坐候。伊藤とも相談致候処、尤も同意に付、陸軍へは山県推立候含に御坐候。海軍は未定なり。明朝今一度協議之上持出候覚悟に御坐候。

松方の辞意撤回を機に、長州閥を中心に元勲級指導者の間で松方への不信が拡がり、陸海相人事において松方のフリーハンドを封殺し政局の主導権を握ろうとする動きが現われたことが判る。

一方、この日朝、明治天皇は伊藤を召致して善後策を諮り、このころから伊藤の周辺でも政客の往来が繁くなって来た。七月二十九日付伊藤宛伊東書翰[39]には「唯今含雪将軍来訪、今朝御参内前に是非得拝晤度に付、伊皿子台〔伊藤私邸〕に御待受可被下歟、又は当官舎迄御出張可被下歟、至急貴答を得呉との依頼に有之候。含雪将軍は西郷伯を見舞われ同邸に而何分之御答相待居候との事に有之候」と、山県の動きと山県が伊藤に接触を求めている様子が見えている。[40]また、七月二十九日付伊藤宛山県書翰には次の如く見える。

御懇書奉拝読候。松方伯引続奉命の儀は概略過刻山田伯来訪伝承、不堪驚愕候（是れは今日小生面会の談話をは御承知と存候）。猶善後策に付老台へ御下命の趣拝承、如来諭実に国家の一大事御同感に存候。明日は午時比には是非参

堂鄙意開陳仕度に付、御帰内午後時刻余り切迫不相成様御含置可被下候。朝来奔走の労は水泡に属し全く老兄の先見に不違汗顔不啻候。

文面から察すれば、山県の松方退陣促進工作について、伊藤は松方は結局辞意を撤回すると踏んでいたように思われる。

7

七月三十日、井上は山田の前日の書翰（前掲）に返書し、松方退陣問題について左の通り述べた。[41] 曰く、

謹読。過日児玉を以一書を呈し候処、急変を生し松方辞職と出、爾後再取下候由、実に無頓着千万、勿論其間種々密計も有之候事と奉存候。高・樺両子は辞職決心之由、就而は山県伯を御推撰云々は拙生大賛成仕候。海軍は真以内部に疚しき事情も有之候得共、兎角今迄之不規律にては国金を費し其効力も無之次第に有之候間、若し閣下御病気に差支り無之限りは自ら御当り被成候事為邦家所祈に候。

井上が山田の山県陸相案に同意した上、山田海相案を提示したことが判る。これは山田と同様、松方の人事権を封殺しようとしたものと考えられる。そして、井上はこの手紙の後段で、その方途について次の様に論じている。即ち曰く、

西郷御相談は至極宜敷候得共、何分宮内省之方之密々御着手被成候而両伯御入閣は聖断に出候事尤肝要に御坐候。熟思仕候得は岩倉を伊藤にても克説論候はゝ聖上え裏面之情実将来之危機等密奏せしめ候ては如何と奉存候。

井上は山県陸相・山田海相の実現は天皇の意向という形をとるべきこと、天皇に政局の実情を訴うべきことを論じて

いるが、それは今や松方政権存続の最後の拠り所となっている天皇の存在を松方から切り離そうとしたものと信ぜられる。因みに天皇は陸海相後任を有栖川宮に諮っており、三十日には「陸大臣ハ山県伯・大山伯ノ内ナラバシカルベシ。海軍大臣ハ中牟田中将〔倉之助。肥前〕カ川村顧問〔純義。薩摩〕ノ内カ。陸軍次官候補者小川又次少将〔福岡〕、青森ノ旅団長岡本平四郎少将〔紀伊〕之内可然歟」[42]と、後任人事案がかなり煮詰まって来ていた。

井上はさらに、この書状の末段で松方退陣工作の進め方について次の様に言及している。

黒田に働きを付させ候事も必要に御座候。是は則西郷伯切迫に自分之説に而薩長間之連合尤愈以必要を感する時節此儘に打置候はゝ松方は民党に不知之間に生擒に陥り候次第等弁説し、黒田伯より松方之反省を生せしめ候手段尤専要に御座候。生も一応帰東御手伝も仕度候得共、当節柄故長人余り頭を揃へ候も如何歟と覚へ殊更に退函仕候。伊藤も長く滞留不仕候而小田原え引取候方上策歟とも奉存候。併此間万端相談を熟し候上にて着手候事肝要と奉存候。互相之間に疑心を生し候而は如何程之善計も有害無益と結果候間、御疎は無之候得共、深御注意為邦家奉祈候。

西郷の発案で黒田から松方に警告させる動きがあったこと、井上が薩長協同しての事態打開を望んでおり、長州人主導の外見を作らぬよう配慮していたことが窺われる。西郷が、松方が民党の「生擒」となりかねないとしているのは、松方が民党と連絡があると見られている非薩長閣僚に政権基盤の重心を移したことを指すと信ぜられる。こうした動きが国民協会領袖の西郷の反感を買ったことは想像に難くないが、井上の文面からは松方の薩長体制からの逸脱が元勲級指導者一般の不信と危惧を呼んでいた様子が読み取れよう。

ところで、このころになると、松方直系勢力の間でも松方政権の先行きに対する不安が拡がり、「松方離れ」とも称すべき現象が顕われ始めていた。伊藤の幕僚ながらも松方の議会対策に協力して来た井上毅は七月二十八日、松方最側近の渡辺国武に書状を送り、その行状を次の様に難じている。[44]

老台は首相閣下之信任第一之人たるは公衆之倶に知る所、近日之事老台之冷然傍視せらるる如きは、生之素より望む所にあらざる也。

また、第二回総選挙時の集票活動など松方に忠誠を尽して来た九鬼もこれより先、左の如き書状を松方に送り、労多くして報いられぬことへの不平を漏していた。[45] 曰く、

実は小生今日の苦境と申すは、何故か将に内閣の交迭あらんとする当初より小生の名前は農商・文部の両候補者として毎日連日全国の新聞紙に載せられたり。不幸にも小生の名前は連日に公告せられたり（何故に内閣の信せざる小生を斯く迄全国の人が妄想したるかと云ふに、第一に閣下幷二三の大臣は小生を信じ居らるゝとの妄念を起したる事、第二に小生が必生（ママ）の力らを籠めて現内閣を助け居る事、小生が子分を挙げ子分を率ひて現内閣を助け居る事は子分等自身の自負は勿論全国万者の見る処にして〔略〕大臣任命と云ふ場合に至りては小生の名は一度も現内閣会議に上りたる事なき有様を諸新聞に表白し（此数日以来）、事情の頓変勢の盛衰爰に至て政事家の常情を以て小生を観察する世人の嘲笑は殆んど小生の堪へ難き処のみならず、子分共の失望憤恚は実に小子の一身に帰し、政事上の運動も子分の統率も何も殆んど爰に渇尽せんとするの難況を呈し来り候事に御坐候。

九鬼は「小生に頓進の色気なし」としながらもこの苦境を脱するため枢密顧問官に任ぜられたいとし、この長文の書状を「何分此上取り残しに会ふたる観相を露呈せさる様に此事丈は何卒速に御決行被成下度」と結んでいる。そこには松方政権の先行きへの絶望感、松方個人に対する失望が拡がっていることは言うまでもない。

こうして、七月下旬になると、松方膝下の幕僚層においても動揺が拡大し、松方政権の支持基盤の危機はさらに深刻化していた。海員の古諺にいう「船が沈むとき鼠は逃げ出す」とも称すべき現象が生じ始めていたのである。

8

さて、七月二十八日ころから山田・西郷の周辺で松方退陣工作が活潑化していたが、二十九日夜からその動きは最後の段階を迎えつつあった。大山巌のメモ[46]に曰く、

七月廿九日午後七時東京西郷氏より電信達す。「面会致度に付、即刻御帰京ありたし」と。翌卅日午前三字沼津を発し九時に東京に着し、一先つ青山に帰り直に西郷邸に到れは、山田伯・川上中将等来り居れり。然るに山田伯より今日迄(の)形勢逐一相話され、松方首相も一度は辞表を差出されたれとも色々止める人もあり、又は主上より再三に及ひ留任致し候様御沙汰にも相成、夫故一時相留まり居所なり。然るに海陸軍大臣の後任は兎ママとも〔以下欠〕

「大山メモ」が後段を欠くため細部に確かめ難い点が残るが、山田が西郷邸において大山に対し、松方慰留の動きがあるが陸海相後任は得られそうもないとして、松方退陣工作への協力を求めたことは間違いないものと思われる。西郷邸で大山を待ち受けていたのは西郷・山田・川上の他、仁礼景礼海軍大学校長（薩摩）であり、彼らの間では既に爾後の段取りが合意されていたもののようである。この直後、大山は川上・仁礼を同道して松方を訪ね、辞任を勧告した。伊東が品川から聴いた処として伊藤に報じた処に拠れば[47]、

今朝大山伯沼津より帰京、仁礼・川上の両中将と共に松方伯を三田邸に訪ひ、過日一旦辞表を差出したる後優渥なる聖旨に対し奉りては臣子の分として、席に固辞する訳にも参り難かりしならんとは言へ、別途方針に付確乎たる見込無之に於ては徒らに聖恩に浴し曠職の罪を免れさるへく、今日に至り当初の決心を飜すは為国家、且は友誼上よりしても注告せさるを得ずと諄々三将軍と口を揃へて勧告せられ候処、松方伯にも注意尤の事にて、自分にも折

角の御思召と云ふに対し奉り暫らく意を枉けて御請申上候次第なれは、今日迄も退引の外他意なしとの意を述られ、就ては本日三時比より臨時閣議を開き更に其旨を閣僚に告白すべしとて、三将軍に対し最後の決心を示されたる由。と見え、松方が大山・川上・仁礼の退陣勧告を受け容れた様子が判る。川上・仁礼は陸海軍の薩摩出身軍人をそれぞれ代表したものであろう。依然、天皇・有栖川宮による後任人選に期待をかけ政権維持を図るという選択肢は残っていたが、松方はここに至って薩長の元勲級指導者が挙って松方退陣に動いているのを見て、薩長体制からの逸脱が自分の将来に悪影響を及ぼすと考え、政権維持を断念したのであろう。

実際松方の支持基盤のうち、白根グループは既に切り捨てられ、これに伴い国民協会でも松方への絶望感・反撥が拡がっていた。協会領袖の西郷が倒閣に動いたり、品川が松方退陣の報に「喜色満面」[48]となったのは、協会が松方退陣による局面転換を望んでいたことの一つの現われであろう。また、薩摩出身閣僚も松方への反撥を強めており「閣下御辞職一時思止まらせられたる義に付、一昨日非常に奮激之模様」[49]と今や松方退陣を叫ぶ有様であった。松方直系勢力にも亀裂が生じつつあったのは先に見た通りであり、盟友松方のために尽力して来た黒田も漸く動きを停めようとしていた。それでも松方は、一旦は天皇の激励に応えて、最後まで残った非薩長閣僚を基礎に政権維持を試みたのだが、元勲級指導者が一斉に反松方に動くのを見て、ついに政権維持を諦めたのである。

しかし、藩閥の一部には、最後まで松方政権を支えて来た非薩長閣僚が、松方政権の瓦解を座視傍観するか否か不安が抱かれていた。松方退陣により活躍の場を失うことになる非薩長実力者が最後の抵抗を試みる可能性は十分に存在したのである。七月三十日付井上宛伊東巳代治には「後藤・河野・板本・佐野等之大臣は必らす長閥より排擠せられたりとて憤懣の声を洩すへく、今後之形勢愈危胎に赴くへきは炳焉に有之」[50]と見える。憲法は内閣の連帯責任制を定めていなかったから、彼らが辞職を拒んで居坐りに出ることも考えられないではなかった。

だが実際の処、非薩長閣僚の動きへの懸念は杞憂の域を出なかった。彼らは松方の措置に不満を残すものの、すでに松方政権維持への気力を失っていたのである。七月三十一日付黒田宛榎本書翰[51]に曰く、

松方首相は昨夕再たび辞表捧呈、而して其理由は閣僚一同に向て弁明せず、只々不徳にして不堪重任とのみなり。一同ももはや説諭の力も抜け候。聖上も御あきらめ被遊候御様子、乍去新総理之出来候迄は表向き御聞届には不相成事に御決定相成候。首相之内情には定而種々困難なる事柄可有之、実以而気之毒千万に候へ共、総理大臣たる者之進退責任上より論する時は不得其意者多く、是は小生一人之私言にあらず、閣僚一同之遺憾とする所に御座候。

非薩長閣僚が松方の努力不足を遺憾としながらも、松方政権の存続についてはもはや諦観の境地に達していたことが判る。三十一日午前、先に天皇から松方慰留を嘱されていた非薩長四閣僚は参内して、天皇に現在の情況を報告した。「徳大寺日記」七月三十一日条[52]に曰く、

午前十時四大臣拝謁、首相留任ノ事勧告スト雖、留ルヘキ気色ナシ、又辞スルノ理由モ判然セザレトモ此上ハ強而留職ヲ勧メザル奏聞ス。陛下問云、総理新任者見込ハ如何。榎本云、黒田カ伊藤カ。後藤云、伊藤宜シカラン。河野、伊藤適任タルヘシ。佐野云、伊藤可ナラン。

藩閥の一部で懸念された非薩長閣僚の抵抗は無く、彼らも伊藤後継首班説に傾斜していたことが判る。榎本が伊藤の他に黒田の名を挙げているのは、五稜郭以来刎頸の友といわれる黒田・榎本の関係に基づくものであろう。

9

非薩長四閣僚の奏上を受けて、天皇も後継首班銓衡に動き始めた。この日、天皇は伊藤・山県・黒田の三人に召命

を発し、山県・黒田は同日、伊藤は八月一日に拝謁している。八月一日付井上宛山県書翰[53]には「昨夕黒田幷小生えも参内候様との事に付、罷出目下之事情細縷及上奏候」と見え、「徳大寺日記」八月一日条[54]には「宮内大臣伊藤伯へ御使トシテ被差遣、午後七時前伯拝謁被仰付」と見える。天皇は八月一日、徳大寺侍従長を黒田邸に派し「現今之内閣情況ニ付、伊藤、山県等へ協議遂将来ノ方向ヲ定ムヘキ事[55]」との御沙汰を伝えしめ、後継銓衡作業に入るよう指示した。翌二日には井上馨が召命により拝謁している。

八月二日、伊藤・井上・山県・山田・大山・黒田の六人は伊皿子の伊藤邸に集まり、首班選定のための元勲会議を催した。八月三日付井上宛黒田書翰[56]に拠れば、

然は昨夜来今朝老両伯と御内議必す好結果に了候んと是れ禱居、生は昨夜跡に残り伊老伯之御意思を叩き候に中々不容易、乍然決して御無理ならす、尤至当と相認め候。実に此之際申上なくとも至極難局之場合此之時機去り候は、一層益困難之極に達し臍嚙後悔すとも不及、今昔俯仰不堪之感弥増、賢台下なくんば同老伯を起動する事誰れあつて万々六ヶ敷、是れ偏に畢世之御尽力其良能之智労を御取り此之至難之局を国家之為め御救済有之度儀伏して悃禱之至に候。

と見えており、二日の元勲会議では結論が出ず、井上や黒田がそれぞれ伊藤説得を続けたこと、黒田が井上に伊藤説得を期待していたことなどが読み取れる。伊藤が難色を示した理由についてこの書翰は審かにしていないが、後述するように来るべき第四議会に向けて伊藤の下での元勲級指導者の団結が得られるか否か、各種の政治改革に彼らの賛同が得られるか否かという点に、伊藤はなお疑念を残していたらしい。また、八月二日付伊藤宛末松書翰[57]には「今回は結着之処御引受相成候方と奉存候。輿論も已に左様属望候事に被相察候。国権派抔も過分の口出はもはやなし得不申と存候。昨日一寸佐々友房に遇候。其節今回は伊か出るだらう云々之事故、軽々進退は出来間布随分妨害者もある

ではないかとかけ見候処、彼曰く、併し最早機熟せる様なり云々と申候。本心は兎も角も時の風潮は大概被相知候様存候」「先回穏派中に黒幕を防禦せんとしたる如き挙動之者ありしは不宜旨は乍不及野生共も大分婉曲に湯を廻し置候。協会連中抔も余程気分一変之模様相見候」と見えており、伊藤は国民協会や政府系無所属議員の向背についても懸念していたらしい。

八月三日、今度は三田の黒田邸で元勲会議が続開された。この日の討議では事態は伊藤首相実現に向けて大きく動いた模様である。八月四日に佐藤暢（薩摩。松方の幕僚）が松方に報じた処に拠れば、[58]

昨日黒田伯邸密会都合好しとの事に有之、弥伊藤伯内受せられたりとの説あり。伊藤伯提出案に向ひ、黒田・井上両伯は賛慮之地位に立たるとも山県伯不賛成之廉有之し模様、其条件は漏洩不致候得共、此後に対する改革条件に渉る県治上改良目的若くは対議会策の為に国民協会に不利なる点等ありて両伯意見を異にせしにてはなきやとの疑念に御座候。已に役割等も粗決定致、為に閣下へは本日何分御内報相成候歟の様に申触らし居申候。

元勲級指導者のうち井上と黒田が伊藤への協力を約したのに対し、山県が議会対策などに関して必ずしも同調しない気味があったこと、しかしながら伊藤の政権引受けはほぼ固まり閣僚配置なども概ね定まったことが窺われる。

佐藤は八月六日付松方宛書翰[59]の中でも、伊藤が提示している条件について言及しているが、同書翰に拠ればそれは上記の他、施政方針の公表、対議会強硬派と柔軟派の調和などをも含むものであったらしい。曰く、

伊藤伯昨日参内、多分御受せられたる筈申上候処、只今山田伯に面会せしもの丶直話に、伊藤伯今に御受せず、提出問題殊に困難なりとの事なり。〔略〕某京阪地方より昨夜帰り只今国民協会に立寄りしに、曾根[綱]等出席、彼等密話に、伊藤伯総理たるに付条件中に施政方針を世に公にする事は一同黒幕連中も異論無之、其他武治派と文治派と合体し共に朝に立ち協同一致之運動を為す事に対し、其配剤加味に困難なり、故に今日迄総理決定せすと云ふ事を

中居たる由なり。

伊藤が第四議会に向けて、伊藤の主導権の下での藩閥の一致団結を実現することに執着していた様子が判る。これは六月末の段階ですでに主張されていたことではあったが、伊藤はそれを再び確認すると共にさらに具体的なものにしようとしていたのである。

八月四日には元勲会議は行なわれず「世上に目立程之運動」は無かったが、「国民協会に関係ある躍起組」が「山県伯一味之者をして内閣を相続せしめたし」として活動した。佐藤に拠れば「金虎館に佐々友房等集合之場所故に、是に安場一味并内務大浦輩及ひ各地方より出京之県官等相集り伊藤伯擠排論に怠りなき」様子だったという。[60] しかし、国民協会、古参地方官、白根グループの抵抗も大勢の進行に大きな影響を与えることは出来なかった。

八月五日、伊藤は参内・拝謁した。これを受けて六日、黒田と山県が参内して松方内閣退陣、伊藤内閣組織の事情を奏聞した。[61] 以上の動きから察すれば、三日の元勲会議で新内閣組織の協議はほぼまとまっていたものと考えられる。

伊藤は八月六日、本格的に組閣に着手し、同日中には概ね作業を終えた。閣僚銓衡の中で問題となったのは海相人事で、候補となった仁礼景範が固辞したため一時難航したが、黒田と大山の仲介により夕刻までには仁礼も入閣を承知した。[62] 元勲級指導者の閣僚配置については交渉経過を語る史料が乏しいが、これは恐らく組閣開始の前の段階で基本線がすでに固まっていたことを示すものと思われる。

10

八月八日、宮中で親任式が行なわれ、第二次伊藤内閣が成立した。同内閣発足時の閣僚構成は次の通りである。

総理　伊藤博文（長州）　外務　陸奥宗光（紀伊）　内務　井上馨（長州）　大蔵　渡辺国武（高島＝松方派）　陸軍大山巌（薩摩）　海軍　仁礼景範（薩摩）　司法　山県有朋（長州）　文部　河野敏鎌（土佐）　農商務　後藤象二郎（土佐）　逓信　黒田清隆（薩摩）

この他に閣議出席資格を持つ準閣僚として内閣書記官長に伊東巳代治（長崎の町人＝伊藤派）、法制局長官に末松謙澄（小倉＝伊藤派）がいる。松方が入らなかったのは前首相としての政治責任をとったもの、西郷が入らなかったのは国民協会領袖である西郷を入れれば「国民協会と共にする時は有識士忌嫌する政党内閣直に樹立すると云ふ道理」[63]即ち超然主義との関係によるものと見られる。山田については「山田云々は黒田より談合有之候へ共、一旦上奏相成居候事は今更変更之儀は頗感難候事に有之」[64]と、その入閣を求める動きがあったが実現せずに終っている。健康の回復が未だ十分でなかったのかも知れない。

一方、松方退陣に伴い非薩長閣僚の進退が注目されていたが、後藤は八月七日、伊藤の意を体して打診して来た松方に対し次の様に答えている。[65]

今日之行懸渾て辞表差出訳にも参り兼、且政党内閣之景状相顕候よう之姿も不面白、近日中総理大臣新任相成候上は同大臣之方針等承り、格別之異見も有之候はゝ自然退職之方夫々手順相立度と皆々申談居候次第なり。

非薩長閣僚たちが模様眺めの一方で薩長主軸の政権を容認することを考慮していたことが判る。松方が伊藤に「尤昨夜も御談仕候通、直に枢密え転任相成候得は別而都合可然」と書いているように、松方と伊藤は非薩長閣僚の枢密院転出の線で固まっていたようだが、実際に退閣したのは大木と佐野と榎本の三人で、後藤と河野は横滑りして残留している。非薩長実力者としてはこの他、陸奥が新たに入閣しているが、陸奥・後藤・河野はいづれも政党に関係があると見られている人物であり、この人事が「明治政府末路之一戦」[66]とされる第四議会を念頭に置いたものであること

は想像に難くない。

そして、伊藤は六月末以降の一連の政権引受け交渉を通じて大部分の元勲級指導者の支持を取りつけることに成功しており、特にライバルである黒田と山県に伊藤の下での協力を約束させ後顧の憂を断っていた。政党との最後の決戦に臨む藩閥の体勢は伊藤の主導権の下、概ね完成されつつあったといえよう。

おわりに

第一次松方内閣末期の転変極まりない政局は、さながらこの時期の藩閥の政治的特質、問題点を照らし出す鏡の如きものであった。もともと指導力に乏しく基盤の弱い松方政権においては、藩閥の弱点、問題点が表面に顕われがちであったが、それらの矛盾は第三議会での政党との衝突を契機に次々に露呈し深刻化した。それは続いて、これまた政党対策と関連する選挙干渉責任問題の処理に当って極点に達し、遂に松方政権を退陣に追いやったのである。いま本稿を閉じるに当って、藩閥の諸勢力の動き並に超然主義の問題に注目して、松方内閣末期の政治の動態と特質・問題点を総括し、併せて展望を試みよう。

藩閥の第一人者伊藤は政府系新聞統一提理問題から政府党結成問題に至る一連の失敗に鑑み、松方政権に対して戦略守勢を旨とした。最有力次期首相候補たる伊藤は、松方政権への支援を手控え、即ち松方政権の延命に手を貸さず、松方政権が内外の矛盾の深刻化によって自滅するのを待った。伊藤は来るべき政党勢力との最後の決戦に勝つためには伊藤の指導下で元勲級指導者を網羅した内閣を作ることが必要であると考えており、推されて首相となることを望

んでいた。伊藤は松方政権への積極的敵対によって政敵を増やすことを嫌い、主動的姿勢をとらなかった。このため伊藤の松方政権への対応には今一つ煮え切らぬ処が残り、六月末には一旦は松方内閣への入閣に応ずる構えを見せるなど非協力に徹し切れぬ面があった。黒田などはこの点を衝いて松方政権の延命を図ったが、伊藤に比べフリーハンドの大きい井上は山口への退去、十五項目の政策大綱の提示などの政治攻勢をかけ、小回りの利かない伊藤の弱点を補って松方政権を退陣に誘導した。そしてまた、六月末から八月初めにかけての一連の政権引受け交渉の中で伊藤の宿願はほぼ成就し、元勲級指導者の大部分を網羅した第二次伊藤内閣の実現によって伊藤優位の下での藩閥の団結を確保することに成功した。しかしこのとき、山県は入閣・協力の期間をあらかじめ限定することを通じて伊藤に対する対等性を獲得した。一方、これまで伊藤と並ぶ藩閥の二大実力者だった黒田は無条件で入閣し、政治的地位の沈下を示すこととなった。この後しばらく伊藤・山県・黒田の鼎立時代が続くが、第二次伊藤内閣発足は山県の上昇線と黒田の下降線とが交叉する藩閥指導層の歴史の一つの劃期を成したといえよう。

次に松方政権に目を転ずれば、松方は明治二十五年春の段階でその支持基盤を直系幕僚、薩摩出身閣僚から非薩長閣僚、内務省白根グループへと拡大し、さらには白根グループを介して政府系議員や古参地方官とも接触を持っていた。しかし、非薩長閣僚と薩摩出身閣僚・白根グループは議会対策、選挙干渉責任問題、政府系会派育成問題などで相対立する関係にあり、実際そうした対立は絶え間無く露出した。松方は二十五年初夏の段階では議会乗切りを至上の命題としていたが、そのためにかなり情況主義的、機会主義的に対処したため支持基盤内に混乱を呼んだ。第三議会後半、白根グループや政府系議員の叛乱に苦しめられた松方は議会終了後辞意を表明し、一旦は元勲入閣で安定を回復した後に伊藤に政権を譲る構想が固まった。もっとも松方や黒田は本心ではなし崩しの居坐りを狙っていたらしい。しかし、この構想は井上の入閣拒否で潰れ、松方は懸案の解決とも連動する支持基盤の整理を行なって政権の延

命を図ろうとした。それは当初白根グループの切り捨てで完結するはずであったが、実際には薩摩出身閣僚や国民協会、古参地方官などの猛反撥を招く結果となった。松方は政権維持に重心を移し、動揺しながらも天皇や黒田の激励に応え、薩摩出身閣僚を切り捨て、非薩長閣僚を政権の主軸に据えて生き延びようとした。しかし、松方の薩長体制からの逸脱を恐れる元勲級指導者は一致して松方に退陣を求め、松方は遂に政権維持を断念するのである。[67] 松方の政治指導は支持基盤の多様さ、弱さや彼の個性を反映して概して一貫性に乏しく、「後入斎」「泥に酔ふたる鮒」などの悪評を得たが、当初の政治基盤の脆弱さを新興勢力・傍流勢力との提携や勢力間の相互牽制作用によって補い予想外の政治力を発揮した。元勲級指導者の中では格下の存在と見做されていた松方の善戦健闘ぶりは、彼の政治的地位を大きく上昇させ、後日の再組閣を可能にした要因となったといえよう。

白根次官を核とする内務省の藩閥第二世代官僚、即ち内務省白根グループは政党との対決姿勢を一貫して崩さず、この時期の政局の一焦点を成した。彼らは選挙干渉を容認し、議会対策においても政党への譲歩を頑として拒み続けた。彼らは古参地方官、政府系議員に大きな影響力を持ち、しかも薩摩出身閣僚とも良好な関係にあった。そして彼らはこうした政治的財産を持った上で松方と提携していたから、国政全体に一つの政治主体として影響力を及ぼすことが可能であった。白根が次官の身ながら副島更迭に成功し、白根解任が松方内閣退陣の契機となり得たのはそのためである。結局彼らは松方に切り捨てられ白根グループは一旦解体したが（二十五年八月、白根の宮中顧問官就任に続いて小松原は静岡県知事に、大浦は大阪府書記官に転出させられている）、この時に形成された白根グループ、古参地方官、国民協会を結ぶ人脈は後年の山県閥の主要部分を成している。第一次松方内閣は藩閥第二世代官僚にとって絶好の政治的培養基となったといえよう。

さて、第一議会以来の政府系会派である大成会は第二議会での衆議院解散に伴って解消し、総選挙終了後新しい政

府系会派設立が企てられた。この結果、二十五年四月、井上角五郎グループ、九州選出議員、近畿選出議員、末松謙澄グループを主要構成要素とする中央交渉会が成立した。全体の統制を優先し政党型組織とするか、人数確保を優先し地方別団体の連合体とするかが問題となったが、このときは政党型組織とすることは見送られ、地方別団体の連合体の院内会派として発足している。しかし、第三議会における政党勢力との対決、そして松方政権の政党勢力への妥協（即ち唯一与党たる中央交渉会への背信行為）は中央交渉会に強力なリーダーを戴いた組織政党型システムへの改組の必要性を痛感させた。内相経験者として由縁の深い西郷、品川が担ぎ出されたが、藩閥首脳たる二人がリーダーとなるとき超然主義との間で軋轢が生ぜざるを得なかった。実際に成立した国民協会は中央組織としては政党に類似しており院内会派でもなかったが、協会そのものは社交倶楽部の形態をとり、所属議員はその一部と位置づけられた。藩閥首脳を党首とすることで超然主義と抵触することを避けたわけだが、藩閥関係者の間にはなお疑念を持つ者も多く、期待された伊藤や井上の支持・容認も得られなかった。協会では第一次松方内閣末期の混乱を、内務省白根グループや古参地方官、さらには薩摩出身閣僚と結んで収拾し、協会を松方政権の有力基盤として政局の主導権を握ろうとする動きがあったが、白根解任によってその望みは断たれ、政府との関係も稀薄化した。こうして、成立したばかりの協会は政治的培養基たるべき松方政権の庇護を失い、早くも苦境に立たされた。協力の主力を形成する九州選出議員などには協会をより組織政党に近づけようとする動きが存在したが、品川らは超然主義への配慮から踏み切れず、その後一年半に亘って組織問題が続くのである。

松方政権下の「力の真空」はそれまで元勲級指導者の下で封じ込められていた様々な勢力、即ち子爵級実力者、藩閥第二世代政治家／官僚、非薩長実力者、古参地方官、さらには政府系会派などを活性化させた。彼らの政治的独歩は一年三ヶ月続いた第一次松方内閣に様々な提携と相克をもたらし、それは議会での政党との対決を触媒として増

幅・変容した。この変調は第二次伊藤内閣の成立によって「力の真空」が解消したとき表面的には一旦収まったかに見えたが、議会での政党との対決という刺戟が外界から続いている以上、その潜熱は容易に消えなかった。やがて政党との対決が極点に達した後、伊藤・松方らが政党との妥協に踏み切ると、緩衝装置、パイプ役としての役割を失った非薩長実力者は漸次退場したものの、子爵級実力者、第二世代政治家／官僚、古参地方官、政府系議員の主要な部分は反政党の共同戦線を再現・強化し、最終的には山県の下に結集して藩閥の様相を変えてゆくのである。

（完）

註

(1) 『東京日日新聞』明治二十五年七月十六日号。
(2) 『国会』明治二十五年七月十七日号。
(3) 『東京日日新聞』明治二十五年七月十九日号。
(4) 明治二十五年七月十七日付松方正義宛榎本武揚書翰第一信（「松方正義文書」→六—五八）。
(5) 「松方正義文書」→六—五七。
(6) 『伊藤博文関係文書二』二二八頁。
(7) 明治二十五年七月二十日付伊藤博文宛内海忠勝書翰第二信（伊藤博文関係文書研究会編『伊藤博文関係文書九』〈塙書房、昭和五十六年〉七六頁）。
(8) 『国会』明治二十五年七月十五日号の雑報「国民協会の奔走」。
(9) 筆者所蔵。
(10) 『伊藤博文関係文書九』七六頁。
(11) 早稲田大学図書館特別資料室所蔵「渡辺幾治郎収集謄写明治史資料」。
(12) 『伊藤博文関係文書二』二二八頁。
(13) 「井上馨関係文書」。

(14) 明治二十五年七月二十二日付伊東巳代治宛伊藤博文書翰（「伊東巳代治関係文書」）。
(15) 「松方正義文書」→七―四三六。
(16) 「松方正義文書」→七―四三五。
(17) 『東京日日新聞』明治二十五年七月二十二日号。
(18) 「松方正義文書」→七―四五六～四五七。
(19) 明治二十五年七月二十三日付井上馨宛伊東巳代治書翰（「井上馨関係文書」）。
(20) 註10参照。
(21) 「松方正義文書」→九―七九。
(22) 調所は鳥取県知事、安場は愛知県知事に転出した。
(23) 「井上馨関係文書」。
(24) 『伊藤博文関係文書二』二二九頁。
(25) 『伊藤博文関係文書二』二三〇頁。
(26) 『伊藤博文関係文書四』三五〇頁。
(27) 明治二十五年七月二十六日付品川弥二郎宛山県有朋書翰（「品川弥二郎文書」）。
(28) 『伊藤博文関係文書三』五一頁。岩倉の記した日付は「七月廿七日正午」となっているが、冒頭には「昨廿七日」とあり、また内容的に見ても日付は岩倉の誤記と考えられる。
(29) 津田茂麿『明治聖上と臣高行』（自笑会、昭和三年）七五七頁。
(30) 「渡辺幾治郎収集謄写明治史資料」。
(31) 『明治聖上と臣高行』七五八頁。
(32) 「渡辺幾治郎収集謄写明治史資料」。
(33) 『明治聖上と臣高行』七五七～七五八頁。
(34) 「黒田清隆文書」。
(35) 宮内庁書陵部所蔵「山田伯爵家文書」。

(36) 『国会』明治二十五年三月十九日号。
(37) 江木千之翁経歴談刊行会編刊『江木千之翁経歴談・上巻』(昭和八年) 一八五～一八六頁。
(38) 「井上馨関係文書」。
(39) 『伊藤博文関係文書二』二三一頁。
(40) 『伊藤博文関係文書八』一二八頁。
(41) 「山田伯爵家文書」。
(42) 「徳大寺実則日記」明治二十五年七月三十日条(「渡辺幾治郎収集謄写明治史資料」)。
(43) 註41参照。
(44) 「渡辺国武関係文書(二)」。
(45) 明治二十五年七月二十一日付書翰(「松方正義文書」→七―二五六～二五七)。
(46) 「大山巌文書」。
(47) 明治二十五年七月三十日付伊藤博文宛伊東巳代治書翰(『伊藤博文関係文書二』二三一頁)。
(48) 同右。
(49) 明治二十五年八月一日付松方正義宛佐藤暢書翰(「松方正義文書」→八―二三〇)。高島陸相の言動についての描写。
(50) 「井上馨関係文書」。
(51) 「黒田清隆文書」。
(52) 「渡辺幾治郎収集謄写明治史資料」。
(53) 「井上馨関係文書」。
(54) 「渡辺幾治郎収集謄写明治史資料」。
(55) 「徳大寺実則日記」明治二十五年八月一日条(「渡辺幾治郎収集謄写明治史資料」)。
(56) 「井上馨関係文書」。
(57) 『伊藤博文関係文書五』四一七～四一八頁。
(58) 「松方正義文書」→八―二三六～二三七。

(59) 「松方正義文書」↓八―二五一。

(60) 明治二十五年八月五日付松方正義宛佐藤暢書翰第一信（「松方正義文書」↓八―二二五）。佐藤は国民協会との提携は政党内閣樹立に通ずるとして退けている。

(61) 『明治天皇紀　第八』一一六頁。

(62) 明治二十五年八月六日付伊藤博文宛大山巌書翰及別紙（『伊藤博文関係文書三』三〇五～三〇六頁）。なお、「大山巌文書」にはこのとき大山が黒田に送った書翰の草稿と見られるものが二種類残っている。

(63) 註60参照。

(64) 明治二十五年八月八日付井上馨宛伊藤博文書翰（「井上馨関係文書」）。

(65) 明治二十五年八月七日付伊藤博文宛松方正義書翰（『伊藤博文関係文書七』一五二頁）。

(66) 明治二十五年七月三日付井上馨宛山県有朋書翰（「井上馨関係文書」）。

(67) 明治二十五年六月二日付伊藤博文宛伊東巳代治書翰（『伊東博文関係文書二』二一一頁）。

〔付記〕本稿の執筆に当っては宮内庁書陵部の御好意により「山田伯爵家文書」を、東京大学史料編纂所の御好意により「西郷従道家書翰帖」を、早稲田大学図書館特別資料室の御好意により「徳大寺実則日記」を利用することを得た。記して感謝の意を表する次第である。